みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

西洋との接触：オーストラリア・アボリジニとキリスト教ミッションの半世紀：北東アーネムランド・ヨロンゴの記憶

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-02-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 窪田, 幸子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003507

第3章　西洋との接触

オーストラリア・アボリジニとキリスト教ミッションの半世紀
——北東アーネムランド・ヨロンゴの記憶——

窪　田　幸　子*

はじめに
Ⅰ　北部オーストラリアの開拓とミッション
1　19世紀の北部オーストラリア
2　20世紀のミッションの展開——第二次世界大戦まで——
3　第二次世界大戦（1939–1945）の影響
4　戦後のミッション
Ⅱ　メソジスト派ミッションのアーネムランドでの展開
1　メソジストの北部ミッション方針
2　ミッション・セツルメントの発展
3　メソジストと CMS
Ⅲ　伝道師とヨロンゴの対応
1　メソジスト派の伝道師たち
2　適応化運動 Adjustment Movement
3　イルカラでの土地訴訟
おわりに

はじめに

約200年前にはじまったオーストラリア大陸へのイギリス系移民による入植の歴史における先住民との関係は，固定したイメージで語られるものとなっているといえる。入植がすすむにつれて，先住民であるアボリジニは暴力的な迫害をうけ，人口を減らし，彼らの伝統文化は剝奪されていったという歴史観である。それは1988年のオーストラリア200年祭で，シドニーの町でアボリジニたちが大規模な抗議の追悼デモをおこない，200年は先住民にとって侵略の歴史であったという主張をおこなったことや，2001年のオーストラリア連邦成立100年記念を目前として，これまでの先住民に対する不当な扱いを清算し，主流社会側と先住民との和解を図ろうとする政府の動きなど

* 広島大学総合科学部

Key Words: North Australia, Aboriginal people, colonization, Christian mission, micro-history
キーワード：北部オーストラリア，先住民，植民，キリスト教ミッション，ミクロな歴史

の中にも如実に現れている[1]。

しかし，オーストラリアにおける入植のあり方や，迫害の程度，それに対するアボリジニの対応は，決して一様に一枚岩的に語りうるものではない。例えば，筆者の調査するオーストラリア北部に位置するアーネムランドにおいては，オーストラリアの他地域とは大きく異なり，本格的な植民は遅く，かつ暴力的な接触はほとんど経験されなかった。遠隔地であったこの地域への入植が細々と始まるのは，1800年代の半ばのことであり，しかもキリスト教ミッション[2]が主体の入植であったためである。

現在のオーストラリアでは，ミッションと言えば同化主義の手先だった人々と批判的に扱われる場面が多い。一例をあげれば，戦前から戦後にかけて，混血のアボリジニの子どもをアボリジニの家族から取り上げ，ミッションの施設や白人[3]の家庭で育てるという施策がとられていたのだが，これが現在「盗まれた世代（stolen generation）」問題として，政府の公式謝罪が求められている。委員会による実態調査が行われ，和解が模索されているが（Commonwealth of Australia 1997），大きな社会問題のひとつとして注目を浴び，メディアでもしばしば特集される。その中で当時のミッションの活動が批判されているのである。

ところが調査地であるアーネムランド北東部のヨロンゴ（Yolngu; 人間の意）を自称とする人々の地域では，入植の歴史的経緯が異なるだけでなく，入植についての認識，記憶も他地域とはおおきくずれがある。調査地の特に現在40代以上の人々は，今でもミッションの時代をよく覚えており，とてもよい時代として語る。彼らの中には当時の伝道師たちの名前や家族構成を細かく覚えている者も多く，特に長くこの地に滞在した伝道師たちのことは，敬愛を込めて語る。たとえば現在は引退して南部で暮らしているが，50年近くの時間をアーネムランドで過ごしたハロルド・シェパードソン（Harld Sheperdson）のことは，現在も愛称のシェピーという名前で日常の話題にのぼる場面が多く，10年ほど前に彼の妻が死去したこと，現在の彼の健康状態や生活状況などは，エルコのアボリジニの人々の共通の知識となっている。南部に訪れる機会があった者が彼を訪れることもしばしばある。シェピーは4年前には，町の新空港のオープニングのセレモニーに招待され，人々は彼との握手のために長い列をつくったほどである。また，ミッションの時代の生活の細々としたことを思い出話として語る時に，それが正しいことであった，という事を示すために「バーパ（父）・シェピーが，こういっていたから」という言い回しによくであう。このように，ミッションの人々についても，当時の生活についても，彼らは一様に郷愁と呼べるような感情を持っているように思われる。ミッションの人々はヨロンゴのために働いてくれた，いい人

たちだった，という言い方がされ，それに比べて，現在町にいる白人は自分たちのことばかりを考えて行動している，自分たちと交わることを好まない身勝手な人々として非難する。

人類学的な調査においてその社会を一方的に特定した像に固定してしまうような記述に対する批判（クリフォード＆マーカス 1996, Clifford 1988）のなかで，歴史人類学的手法の必要性が指摘されるようになって久しい。すでに固定化された歴史イメージを脱却するために，伝道師や入植者の残した記述や記録，そして人類学者の民族誌などから，多様な日常実践を記述し，解釈することが求められている。このことはトーマスの主張する植民地主義への歴史的アプローチに重なるものである（Thomas 1992)。こうした立場にたつことによって，アボリジニの人々の主体的なかかわりの姿とともに，現在へのダイナミックな道筋を照射することができるであろう。筆者はこうした問題意識のもとに，以下の二つの目的を持ってこの論文を構成している。第一には，「オーストラリアへの入植」とひとくくりにして語られてきたイメージと異なるアーネムランドの人々の経験した歴史，より限定的にはエルコ島を中心とする調査地の人々の経験した歴史の独自性を示すことである。第二には，調査地域の入植の過程とそれに対する先住民の対応を細かに見ることで，入植者側の植民にかかわる思想と実践の多様なあり方と，被入植者側の対応の間の相互関係を知ることである。調査地のアボリジニにとってミッションはどのような存在であり，この半世紀の歴史を彼らはどのように語り，取り込み，現在があるのだろうか。彼らがとらえる歴史を考えることからポストコロニアル状況を生きる彼らの生の一側面に迫りたい。

I　北部オーストラリアの開拓とミッション

1　19世紀の北部オーストラリア

はじめに調査地のあるアーネムランドおよび北部地域の歴史を，ハリス（Harris 1990）を手がかりにしつつ，ミッションとのかかわりを中心に概観してみることにする。アーネムランドは遠隔地であり，白人が最初にこの地域を訪れるのは19世紀になってからのことである。1814年にフリンダース（M. Flinders）という探検家が北部を航海し，その記録を残している。最初の白人の居住はそのあと1824年のことで，メルビル島をはじめとして北部海岸の3カ所に相次いでキャンプが築かれている。開拓の足がかりとしての拠点の建設ではあったが，いずれも維持が困難で数年で閉鎖されて

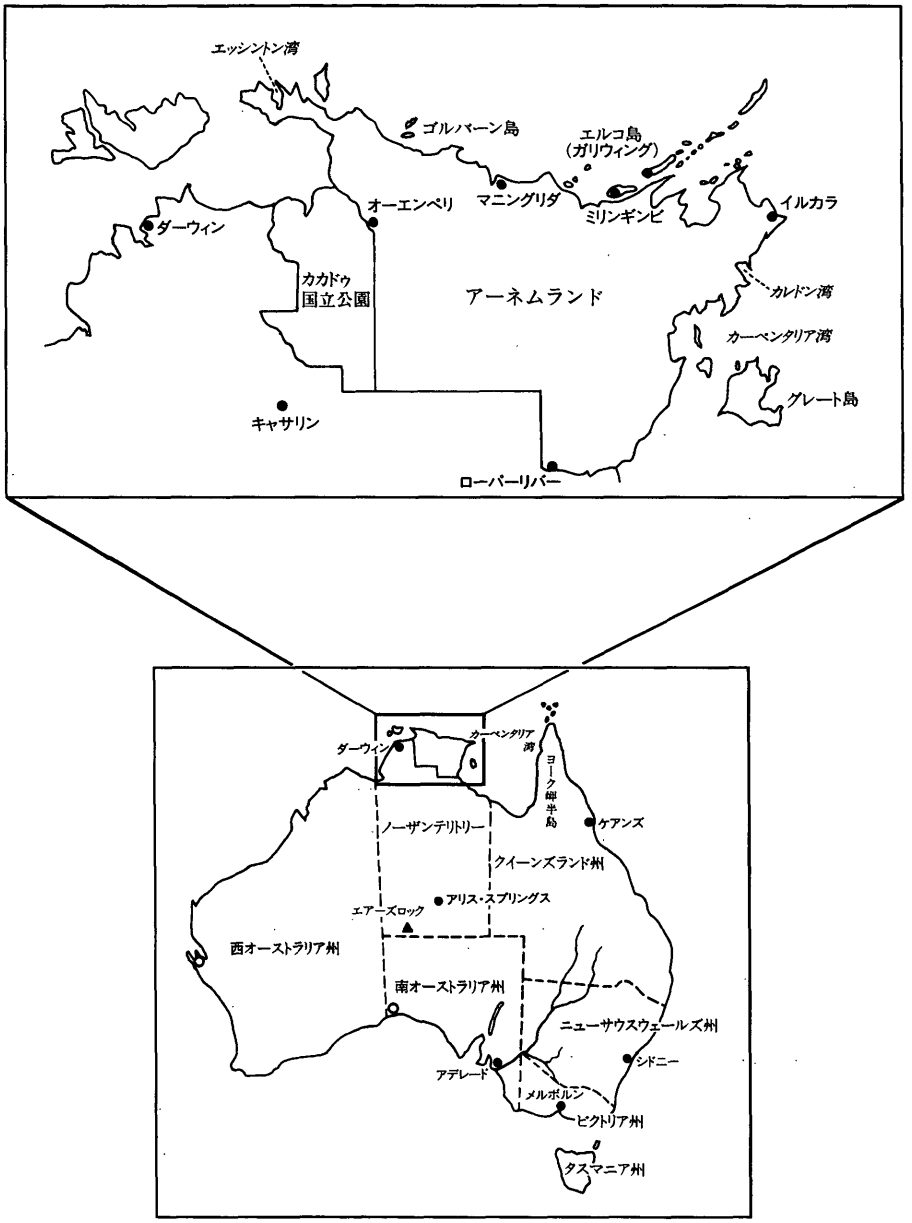
いる。唯一，ダーウィンの東のエッシントン湾（Port Essington）に1838年に建設されたキャンプが1849年まで11年間続き，カソリックの牧師が1846年に一人はいり，アボリジニと比較的良い関係をつくったと記録されている。

本格的な北部におけるミッションの活動は，1863年頃から始まるイエズス会によるものである。試行錯誤のあと，かれらが実際に現在のダーウィンの町の東部にキャンプを設立し始めるのは1882年のことであった。このキャンプはのちにセント・ジョセフと命名されるが，この地域の主要部族のララキア（Larrakia）族のアボリジニたちが徐々にこのキャンプに定住をはじめ，農業を手伝うようになり，1885年には学校教育も始まった。

このセント・ジョセフ・ミッションでは，自給自足をめざして模索が繰り返され，他地域への進出の試みもされた。しかしアボリジニたちの定着性の低さの問題や，他部族との緊張関係の問題，経済的な問題などがあって，紆余曲折ののち1899年に閉鎖される。このイエズス会ミッションの活動の特徴として注目されるのは，活動が平和的であり，押しつけがあまりない点である。まず数人の伝道師が共同して，居住地を整備し，農園をつくり，そこにしだいにアボリジニが集住する。伝道師はそのアボリジニの部族の言語の学習に力を入れ，学校教育を行い，ともに暮らしながら自立できるコミュニティーの成立をはかるというものである。つまり，明白に強圧的にみえるような文化的侵略は，北部に関しては最初からほとんど見られなかったことが指摘できるのである。

もちろん，その一方でミッション以外の強制や暴力を伴うような入植が皆無だったわけではない。1870年代後半，北部のダーウィンまで，牛を移動させてゆくルートとして，水場の確保が困難であった，それまでの大陸の真ん中を垂直に北上するルートの他に，新たにカーペンタリア湾から西へ向かい，北部の中心地，ダーウィンへというルートが開発された。その中で，この道沿いに位置するアーネムランドの東南部のローパーリバー地域に，牧場としての潜在的可能性があることが発見され，キャサリンをベースとしてこの地域の牧場リースが始まった（地図参照）。この牧場は1890年代にいったん経済的理由によって放棄されるのだが，このとき同時に牧場運営の障害として，家畜を殺してしまうなどのローパーリバー地域のアボリジニの攻撃性が指摘されていた。1899年に，この地域のリース権はロンドンに本社をおく食肉輸入会社に移り，アボリジニの抵抗に対して，彼らを根絶するという強硬手段が会社の方針として決定される。こうして実際に，多くのアボリジニが殺害され，ローパー地域のアボリジニは誰でもがこの時期，家族の中に殺されたものがいる経験を持つといわれるほ

どであった。こうした経緯のなかで，アボリジニの保護と地域の平和的安定をめざして，1908年にローバーリバーのミッションが設立された。このように，局地的には白人による暴力を経験し，制圧された後にミッションを受け入れるという南部のアボリ



地図1　アーネムランドと，本文中に現れる都市とミッションの位置

ジニと類似した経験をもったアボリジニたちも存在したわけであるが，アーネムランド全体から見ると，これはむしろ例外的なケースであったという事ができる。

2　20世紀のミッションの展開——第二次世界大戦まで——

20世紀にはいって，アボリジニ像が変化していくなか，各教会では，北部へのミッション展開に関心を強めていった。当時アボリジニは，死にゆく民族と考えられており，南部のアボリジニはもう救いようのない，崩壊した民族であると理解されていた。その一方で，北部には，野蛮で，自然状態の，攻撃的なアボリジニがいるというイメージが，オーストラリア全体にひろくゆき渡っていた（Dewar 1995）。このイメージは同時に，それゆえ彼らはまだ文明に毒されておらず，救うことが可能な「本当の」アボリジニであるということになる。このような了解に基づき，それぞれの教会がミッション活動を繰り広げて行った。1912年にはメルボルンで，プロテスタントのミッション間で，アーネムランドを中心とする北部海岸地域をどのミッションが受け持つかの話し合いがもたれ，地域割りが行われた。このときの話し合いに基づいて，筆者の調査地域である東アーネムランドにはメソジスト派ミッション（Methodist Overseas Mission）が入植することになってゆく（Harris 1990）。

20世紀にはいってから1930年代頃までのオーストラリアでは，全体的にいってアボリジニを未開であるとする見方が優勢であったということができる。つまり，アボリジニは野蛮で下等な民族であり，文明化は難しいと考えられていた。そして，白人とアボリジニとの混血の子どもであればそれだけまだ可能性があるとされた。こうした考え方にのっとって，ハーフカーストと呼ばれる混血の子供を，純血の母親から引き離し，寄宿舎で教育するという方策がとられた。当時のミッションの活動は，この混血の子供の教育と，アボリジニを居留区において管理監督することの二つに，主に注がれていたといっても過言ではない。しかし戦争の直前になると海外からアボリジニの扱い方についての批判がではじめたことなどにより，政府のアボリジニへの対応は変化の兆しを見せるようになっていた。

1928年には当時のクイーンズランド州のアボリジニの主任保護官であったブリークリー（J. W. Bleakley）が連邦政府からノーザンテリトリーのミッションについてのレポートを求められ，各地のミッションを訪れている。かれは1929年に提出したブリークリー・レポートとよばれる報告書のなかでアーネムランド地域を保護区とすること，すなわち，アーネムランドという部族地域に居住している，いわゆる「伝統的な」アボリジニを慈善的に監督する場所として保護区が必要であると主張した。そして，

その監督に一番適しているのはミッションで，政府の援助のもとにおこなわれるべきであるとも述べている（Dewar 1995）。

1937年の連邦及び州アボリジニ専門官会議（Conference of Commonwealth and States Aboriginal Authorities）では，アボリジニをひとまとめにするのでなく，彼らを「分類」して考えるべきである，と議論された。その内容からも，アボリジニのための保護区は必要なもの，という了解がこのころには広くうけ入れられるようになっていたことが伺える。この会議での「分類」というのは，第一が，町に住んでいる崩壊したアボリジニ，第二が牧場に住む半文明化されたアボリジニ，そして最後が部族地域の文明化されていないアボリジニという三分法であった。第一のグループについては，大人の再教育は不可能だが，子供は白人のレベルにまで教育をほどこされるべきであるとされ，第二のグループに慈善的な指導をし，少なくとも部族的儀礼に参加するなどの環境を保証するべきであり，そして第三のグループのアボリジニには，これまでの居留地とは異なる広い範囲の，他の侵害を許さないような保護区（inviolabale reserves）を与えるべきである，というものであった。これは現在からみれば不当に偏見に満ちた議論ではあるが，少なくとも，アボリジニのための保護区をつくるという意識は広がりをもってきていたことがわかる。

純血のアボリジニは文明化された環境には適応できない人々であり，彼らの生存は，完全な隔離によってのみ可能である，とする生物学者などの専門家の意見は影響力が強く，世論をうごかした。ニュージーランドをはじめとする外国からの圧力もあり，こうした背景の中で1920年の中央砂漠の保護区をはじめとして，4つの大きな保護区がつくられ，その一つであるアーネムランドは，1931年にほぼ現在と同様の広さが保護区に指定された。

当時のアボリジニに対する福祉の考え方は，同化主義と隔離主義のふたつがあった。双方とも保護区の必要を主張しているものの，同化主義の方はブリークレイ（J. W. Bleakley）に代表されるように，一定の地域の中で同化できる時間的猶予を与え，外からの影響を排除し，そのなかで同化するための教育をおこなう，というものであり，隔離主義の方は，人類学者のトムソン（D. Thomson）などに見られる考え方で，白人の都市にいるアボリジニを追い出し，本来彼らがいた場所に押し戻そうとするものであった（Dewar 1995）。

いずれにしても，こうした保護区の設立に象徴されているのは，亡滅してゆく民族としてではなく，将来のある民族として，アボリジニへの対応が検討され始めていた点である。また，政府の中には，人類学者のアドバイスを求めてアボリジニの状況を

変えようとする政治家も出はじめる[4]。シドニー大学の文化人類学の教授であったエルキン（A. P. Elkin）は，1930年代に政府からアボリジニの専門家として意見を求められ，アボリジニは白人と対等な人間であり，彼らが白人と平等に暮らせる未来が可能である，という考え方を示していた。こうした視点がアボリジニ政策の中に取り上げられようとする動きも現れつつあったのである。

3　第二次世界大戦（1939–1945）の影響

アボリジニに対する政策の変化の兆しは，いったん戦争によって全て停止することとなる。1939年イギリスが参戦，この戦争において日本はオーストラリアのもっとも直接的な敵であった。北部地域は日本軍の爆撃を受け，多くの死傷者をだした。ミッションの女性と子供はその多くが南部に避難する。ミッションはいずれも一時的にその機能を縮小することになった。それにも関わらず，この戦争はアーネムランドのアボリジニの白人文化の需要を促進することに多大な影響を与えたのだった。

北部沿岸には日本軍にそなえて多くの軍事キャンプが設立された。北部の，それまでミッションに住んでいなかったアボリジニも，その多くがこうした軍事キャンプとの関係をもった。軍に雇われたアボリジニも多く，そうでなくとも食品や日用品などを求めてアボリジニたちが軍事キャンプにやってきた。

軍に雇われた者にとっては，それは初めての雇用経験となった。それまでのように，小麦粉と紅茶ではなく現金を受け取ったのである。しかも白人の軍人とある意味での対等な関係で扱われるという始めての経験をすることになった。それまで，限られた人数のしかもミッションの白人しか知らなかったアボリジニたちが，「俗な」「ふつうの」白人たちと接触することにもなった。また，軍にはミッションとは比較にならないほどの物資と技術力があった。食事は潤沢に与えられ，様ざまな日用品や物資を買うこともできた。同時にトラクターや戦闘機などの先進の器機や進んだ技術をアボリジニは目の当たりにすることになったのである。つまり，アボリジニの人々は，戦争によってミッションにはありえなかったほどの圧倒的に豊かな白人の物質文化に触れることになった。

1945年に終戦を迎えたとき，多くの人々はブッシュでのかつての生活に戻ることを好まず，そのまま，軍が放棄したキャンプ跡に住みついたり，ミッションの町に居住するようになった。また，戦争中にダーウィンへ移動していったアボリジニも多く，戦争終了後も彼らの多くはアーネムランドに戻ろうとしなかった。これを問題とみた政府は，中央アーネムランドに新たにアボリジニのための取引所をつくる（Altman

1987)。アボリジニが必要とする食料や物資を，ワニの皮などと交換できる場所をブッシュのなかにつくり，彼らをダーウィンから押し戻そうとしたのである。これが後のマニングリダの町になるのだが，このことは，いかに多くのアボリジニが戦争を契機として西洋文明に惹きつけられ，そこから離れがたくなったのかを示している。

4　戦後のミッション

戦後になって様々な変化が起きるが，アボリジニにとってもっとも大きな意味を持ったのは，アボリジニについての責任母体が連邦政府にうつったことであるといわれる（Harris 1990: 784)。なぜならば，そのことによって様ざまな対アボリジニ政策の実質的な変化が可能になり，その迅速な適用も容易になったといえるからである。

1940年代からの諸外国からのアボリジニの扱い方についての批判もまた，アボリジニの状況の変革に大きな意味を持った。戦後になって国連をはじめとする諸外国からのアボリジニへの対応への批判はしばしば政府を困惑させた。政府はその結果としてアボリジニの同化政策をとるようになってゆく（窪田 1993)。

アーネムランドのミッション活動においてプロテスタント系の二つの大きな勢力であった CMS ミッション（Church Missionary Society，以下 CMS）とメソジスト派ミッションは，戦後，その関係を深めてゆく。アドバイザーとしてシドニー大学人類学教授のエルキンらが双方に関わったことに象徴されるように，両ミッションの方針には共通点が多々見られるようになってゆくのである。

このころのミッションの多くは，アボリジニの生存，保護のための場所であり，西洋社会をより抵抗なく受け入れさせるための場所であり，適応により時間を与えるための場所と位置づけられた。各ミッションでは伝道師が現地のアボリジニの言語を習得することを奨励し，部族的な生活は排斥されるべきではなく，むしろ彼らの部族組織と習慣を基礎として，神の王国を建設することを奨励する態度をとった。

次に示すのは，1944年にだされた CMS の全体方針（General Policy and Methods）である。その当時のメソジストの全体方針との大きな差は認められない。

（1）ミッションの基本目標はアボリジニとハーフカーストに神の知識を与えることである。

（2）ミッションは改宗者を教会の正式メンバーに導き，その特権を享受できるようにすることをめざす。

（3）直接的な伝道が常に中心的かつ基本的である。

（4）子供と大人の双方への教育を可能な限りおこなう。それは福音を届けるための補助として，また個人のパーソナリティーの開発と成長のための両方の意味でおこなわれる。

（5）医療行為はミッションの基礎的でかつ重要な使命である。医療は必要なときに，必要なところで，肌の色の違いに関わりなくおこなう。

（6）農業と技術の訓練は，教育の重要な一部である。アボリジニを自活できる状況にするため，自尊心を育てるため，コモンウエルスの有用なメンバーとするため，そして神の国の一員とするためにおこなわれる。

以上の他に，あらゆる行動において以下の点を留意することが指示されている。アボリジニをミッションに依存することで卑下させないように，むしろ彼ら自身の生活と発展に責任を持つように奨励すること，コミュニティの女性の地位を上昇させることをめざすこと，そして，自分たち自身の中での社会的宗教的活動をおこなうように奨励すること，の三点である。

このように，この時期のミッションの方針は，それ以前に比べてアボリジニ文化に親和性が高いものであることがわかる。同化主義ではあるものの，人類学者のアドバイス，つまり文化相対主義的価値観が非常に強く反映されていることが読みとれる。戦前までのミッションでの一夫多妻の廃止，伝統儀礼の禁止，子どもを寄宿舎へ入れる，などにみられるような西洋白人社会の価値観を強力に押し進めるような方策はほとんど見られない。これが戦後のオーストラリア・ミッションの特色といえるだろう。

Ⅱ　メソジスト派ミッションのアーネムランドでの展開

1　メソジストの北部ミッション方針

メソジスト派のミッションは，1916年までアボリジニの人々の間での布教活動を行っていなかった。すでにふれたように，他の教会と同様にメソジスト派においても北部地域の「まだ手つかずのアボリジニの地域」のアボリジニに対するミッションへの興味は大きかった。プロテスタントの教会間での地域割りの結果，メソジスト派には，アーネムランドの北部海岸地域の中央から東部が割り当てられた。初めてのミッションであっただけに，それまでの他の宗派のミッション活動の結果も十分に見ることができたためか，メソジスト派は，ミッションの果たすべき役割を決定する連邦政

府から，布教の前提となる条件をとりつけるために，あらかじめ確固とした言質を得ることに注意深く対応したといわれる（Dewar 1995）。メソジストは連邦政府に対して以下の4つの要求を出している。それは，1）アボリジニのリザーブを隔離すること，2）ミッションの目的のために連邦政府はある程度の土地を無償リースすること，3）ミッションに関係しておこなわれる教育目的の活動や工業活動に適切な補助金の額を与えること，4）原住民の福祉を第一とすること，という4点であった。これらの態度から，メソジスト派は求められた役割を果たすことで，政府に利益を与えるという，自らの位置づけをはじめから明確にしていたという事がわかる。

こうして，1915年にワトソン（Rev. Watson）がメソジスト派最初のミッションの場所を選定するためにアーネムランドへおくられ，ゴルバーン島（Goulburn Island）が選択された。1916年にここにミッションが設立される。1921年の段階で，伝道師のための住居が数軒と，寄宿舎が建設されており，約120人のアボリジニがこのミッションで定住的に暮らし，寄宿舎には40人の混血を含めた子どもが居住していたという（McKenzie 1976）。

ゴルバーン島は，アーネムランドでも西方に位置し，中心地であるダーウィンに近いこともあって，この地のアボリジニたちは，混血の子どもたちの存在からもわかるように，すでに白人との接触を経験したものが多かった。ワトソンは，「まだ文明に毒されていない，堕落していない（unspoiled and uncontaminated）」アボリジニがたくさんいる地域にミッションの活動を拡大したいという思いを常に強くもっていた。1916年の末に，彼はゴルバーン島からさらに東のヨロンゴの地域であるミリンギンビの近くで，300人のヨロンゴの男性が儀礼のために集まっているところに出会った。このヨロンゴの人々にとってはワトソンが初めて出会った白人であった。ワトソンはここを2つめのミッションの基地としたいと強く思い，ミッションの本部に働きかけを始める。1921年，ワトソンは，ジェニソン（Rev. Jenison）とともにミリンギンビへ向かい，ミッション建設の試みが開始されることになる。ところが，ミッションから管理主任（super intendent）に指名され，ワトソンとともにミリンギンビに向かったジェニソンは，ミリンギンビよりもその対岸にあるエルコ島を気に入り，そこにミッションを建設したいと考えた。そして彼は本部との交渉の結果，この島の200平方マイルのリースを得て，翌1922年にミッションを開始した。しかし，ここで石油の試掘がはじまったことから，翌年，結局ミリンギンビに戻って，ミッションを建設する，という経過をたどった（McKenzie 1976）。しかし，エルコ・ミッションの歴史はこれで終わりを見なかった。第二次世界大戦が始まると，ミリンギンビに空軍の

基地が建設された。1942年には日本軍がこの地を爆撃する。こうした状況の中，ミッションは人々と製材所などの機材を避難させる目的で，再びエルコに移されるのである。このとき，多くのアボリジニが伝道師たちと一緒にボートに乗ってエルコに移動し，新たなエルコ・ミッションの建設に尽力した。こうして，戦後ミリンギンビのミッションは再開されるが，エルコもそのまま継続する事になったのである。

2　ミッション・セツルメントの発展

1942年，筆者の調査地であるエルコ島のガリウィンク・ミッションはこうして，成立した。シェパードソン夫妻が，製材所やその他の重要な設備機材を船に積み込み，アボリジニの3家族と一緒にエルコにやってきたときには，50人ほどのアボリジニがすでにこの地に集まっていたという（McKenzie 1976）。エルコでは移動の直後からアボリジニたちの協力を得て，住居，教会，製材所，プランテーション，学校などが次々と建設されていったのである。そして，アボリジニたちもそのまわりに小屋をつくり住むようになった。

1950年代にはいるとエルコのミッションはますます発展していった。スタッフの人数が増え，スタッフ会議が開始され，語学クラスも始まった。飛行機での移動は日常化し，機動力によって物資の輸送も容易に活発になった。初めてのアボリジニのカップルが教会で結婚式を挙げ，1954年にエルコで開かれた教会会議には，アボリジニの代表団が出席した。学校も規模が拡大し，生徒は90人ほどに，白人の教員が二人に増え，新しい校舎も建設された。新しく漁業会社も設立された。ここからは二週間に一度200から300ポンドの魚がダーウィンに空輸されるようになった。1959年末の段階で，エルコには約20人のミッション・スタッフがいたという（McKenzie 1976）。

東アーネムランドではいずれのミッションでも，周辺地域にいたアボリジニの多くは比較的早くミッションで暮らすようになっていったといわれる。ミッションで働いたアボリジニには小麦粉やタバコで給料が支払われ，そのことがミッションへの好奇心をかきたてるとともに，多くのアボリジニの人々をミッションに惹きつける要因になった。しかし，全く問題がなかったわけではない。例えばミリンギンビでは初期の伝道師が一夫多妻をやめさせようとして，アボリジニをムチ打ったために，アボリジニが憤慨し，伝道師を殺そうとする，という事件がおきたことが，記録されている。そのほかにも異部族間での紛争による流血の騒ぎはいずれのミッションでも数多くおきている。しかし，全体的な流れとしてみると，アーネムランドのメソジストミッションは，アボリジニの文化に理解を示し，彼らに歩み寄る姿勢をはっきり示し，アボリ

ジニ側のミッションの受け入れも良好だったといってよいだろう。メソジストのミッションのこのような特徴を，より明確に示すため，CMS と比較しながら見ていくことにしよう。

3　メソジストと CMS

戦争に先立ち，メソジスト派は1935年にミリンギンビに続いて，イルカラにミッションを設立した。このミッションの設立のきっかけには，ある大きな事件があった。アーネムランドの東海岸部はそもそもは CMS に割り振られていた土地であり，東海岸南部のローパーリバーには先に述べたように，20世紀初頭にすでに CMS のミッションが設立されていた。イルカラ設立の背景には両ミッションをめぐる事件との関係があったのである。

1932年に東アーネムランドのカレドン湾で，5人の日本人が殺された。このころ，日本人の漁船が数多くアーネムランドの海域を訪れ，白蝶貝やナマコをとっていた。このような日本人はアボリジニの労働力を利用し，水や食料を得るために彼らとの交渉を持っていた。この時の殺人は，日本人がアボリジニの女性を性的に暴行したことを原因とすると一般にいわれている（Harris 1990）。しかし，Dewar によると，本当の理由は日本人がアボリジニ労働者にひどい扱いをし，約束した報酬を与えない，ナマコの内臓をなげつける，などしたことに怒ったアボリジニが槍を持ち出し，それを恐れた日本人が発砲し，これに対してアボリジニが槍で日本人の殺害するにいたったという（Dewar 1995）。原因はいずれが正しいにせよ，グループの内の一人の日本人が逃れ，この事件が明るみに出る。これをうけて，白人の警官が4人，武装してアーネムランド東海岸地域に遠征する。そして彼らの内の一人，マッコール巡査がカレドン湾に到着後，アボリジニに槍で殺されるという事態にいたって，オーストラリア中から感情的な反応が巻きおこることとなる。危険で野蛮なアボリジニに教訓を与えるべきで，そのためには機動力のある武装した，懲罰のための遠征隊が組織されるべきである，という南部を中心とする世論である（Harris 1990; Dewar 1992）。

こうした中で，それぞれのミッションも行動を起こすが，メソジストと CMS ではその対応に大きな違いがあった。ミリンギンビの監督長官のウエッブは，アボリジニとの平和的関係のためには永続的なミッションの設立が必要で，カレドン湾地域にミッションをつくることで，アボリジニたちは定住生活の有利な点を理解するようになり，白人と平和的な関係をもつようになる，とメソジストミッションの名において進言した。一方，CMS は平和遠征隊（Peace expedition）の計画を連邦政府に直接進

言する。これは武力を伴う懲罰的な遠征隊を保留し，かわりに伝道師が武装せずに，カレドン湾地域に赴き，調査をおこない，殺害者に自発的な出頭を促すことで，事態の収拾を図ろうという案であった。しかしウエッブは，信頼関係を築くには最低2年は必要だとして，この計画に反対し，解決策としてミッションの建設を主張し，この遠征に加わろうとはしなかった（Harris 1990）。

連邦政府は結局 CMS の進言をうけいれ，同年 CMS は，タスマニアにいたワレン牧師（Warren, H.）を隊長とし，オーエンペリの伝道師であるダイヤー（Dyer, A.），無線技師のフォウラー（Fowler, D.）の二人がボランティアとして参加する遠征隊を組織し，送り出すことになった。彼らは，無事カレドン湾に到着し，そこに2週間とどまり，アボリジニたちにインタビューをおこない，日本人を殺した者たち，マッコール巡査を殺した者を探しだし，殺害の経緯の聞き取りに成功した。そして，彼らを説得して同意を得，船でダーウィンへむかった。しかし，ダーウィンにつくと同時にアボリジニたちは逮捕され，手錠をかけられ，収監され，何がおきているのか理解していなかったアボリジニたちはパニックに陥る。そのまま彼らは4カ月のあいだ，言葉もほとんど通じない状態で収監されつづけ，裁判に臨まさせられることになった。

アボリジニの逮捕にいたったこうした一連の状況が広く一般の知るところとなるにつれて，CMS の伝道師への批判が集中した。そもそも伝道師に対しては，保護区であるため他の人々が自由に使えないアーネムランドの富を，アボリジニを奴隷のような無料の労働力として酷使し，利益を私している，という批判がその背景にはあった。それに加えて，今回の事件は，伝道師が警察の手先の役割を果たし，しかも信頼させたアボリジニを欺いたという点に非難が集中したのである。

このような状況の中で，CMS もミッション建設の希望を持っていたが，カレドン湾地域での新しいミッションを建設する許可はメソジストの方に出された。この地域は1912年のとりきめでは，CMS に割り当てられていたにもかかわらず，上記のような事情がメソジストに味方することになったのである。こうして，1935年，カレドン湾をカバーし，必要な地理的特性を備えた場所としてイルカラ（Yirrkala）が選択され，メソジストのミッションが設立された。

Dewar は，この事件に対する二つのミッションの対応の違いを分析し，CMS のワレンとダイヤーは懲罰的な19世紀型の伝道師であり，一方のメソジストのウエッブは，同化主義的かつアボリジニを尊重する20世紀型の伝道師であるとしている。一概にこのあまりに単純化した分析はうなずけないものの，全体的な傾向としてメソジストの伝道師には，アボリジニ文化に親和的な傾向がより顕著に認められることは確かであ

る。そして，このことが，東アーネムランドのアボリジニに与えた影響は大きいと考えられるのである。

Ⅲ　伝道師とヨロンゴの対応

1　メソジスト派の伝道師たち

こうして，メソジストの伝道師たちは，北東アーネムランドのミリンギンビ，エルコ（ガリウィンク），イルカラの3カ所にミッション・ステーションを運営していた。メソジストの伝道師たちの発言には共通する特徴がみられる。詳しくみることは紙幅上，難しいので，三つのステーションの長官たちの言動を選んで，彼らの行動や考え方を概観しておくことにしたい。

ウエッブ（T. Webb）がミリンギンビの責任者になったのは，1926年のことであった。彼はそれまでの伝道師と異なり，一夫多妻でさえも彼らの社会の重要な部分であるとし，西洋文化の圧倒的な押しつけを反省する意見を述べている（Dewar 1995）。彼は最終的にはアボリジニたちは白人的な生活様式を選ばなくてはならないと信じていたものの，それを選ぶかどうかを決めるのはアボリジニであることを強調した。彼はアボリジニの知性を理解し，自分たちの仕事は白人の生活様式を強制することではなく，説明によって彼らにとってもっともよい変化であることを，古いやり方よりも新しいやり方が優れていることを理解し，納得させることであると考えていたのである。ミリンギンビでは，アボリジニに農業や家畜をかうことの概念を教え，生活の基本的なことを教えていったが，強制的な教育は行われず，たとえば，服装についてもむしろアボリジニの要求が主導であり，複婚も禁止したことはなかったという。また，前節で述べた通り，カレドン湾事件のさい，アボリジニを鎮圧しろ，という世論に対して，彼は彼等を安定した定住生活を行わせることで平和化させることができるという意見を貫いている。

また，当初からエルコの責任者であったシェパードソンは，ヨロンゴの人たちをとりまく状況の変化が早すぎることを憂いており，十分に準備の時間が与えられるべきであると主張している（McKenzie 1976）。エルコのミッションでは，当時クラン間の争いがたえないことも，彼の悩みの一つであり，ヨロンゴの伝統的な生活単位である小さなグループで，各々のグループの土地で，ミッションとの関係を強く持ちながら暮らすことが彼らに適していると考えるようになった。彼は積極的にこういったア

ウトステーションと呼ばれるムラの建設を1950年代に進めた。そして，そこでの彼らの生活をサポートするために，いち早く飛行機を導入した。現在のアーネムランドでは，アウトステーションを自分達のクランの土地に建設し，数家族単位で暮らすという居住形態が広く一般的に見られるようになっており，アボリジニの人々のアイデンティティのよりどころにもなっている。しかし，当時の同化主義の考え方の中で，シェパードソンがアボリジニたちがブッシュに帰ることを奨めるという態度を明確にしていることは特筆に価することで，非常にはやい時期に彼らの文化的独自性を重視する態度を持っていたことが伺われるのである。

イルカラの責任者であったウエルズ（E. Wells）は，ゴーブ訴訟に強くかかわりを持った人で，アボリジニの側に立ち，鉱山開発に反対をした（Wells 1982)。1951年，イルカラ地域でボーキサイトが発見された。連邦政府，メソジスト・ミッション上層部，鉱山会社の三者間で協議が行われ，1958年には鉱山開発について，内々の合意にいたっていた。ウエルズは，1962年に主任監督としてイルカラに赴任しているが，1958年になってはじめて彼らの耳に届いたニュースに抗議活動を展開してゆく。そしてこのなかで彼は繰り返し，イルカラのアボリジニたちから，土地についての彼らの概念についての聞き取りをおこなった。彼が一番主張した点は，開発の決定を下すに当たって，アボリジニを蚊帳の外におき，ミッションが彼らの代理として話し合いをし，その結果だけを伝えるのでなく，彼らも対等なパートナーとして話し合いの席につかせるべきであるという主張であった。彼はインタビューを通じて，アボリジニと土地とのつながり，トーテムについての深い理解を示すようになっていった。彼は，ミッションの本部と対立することになってゆくが，それでもアボリジニの立場にたった抗議行動を貫いた。一連のウエルズの動きはミッションの上層部と対立し，結局彼は1963年に主任監督の職を辞し，イルカラを去った。

2　適応化運動 Adjustment Movement

それではアボリジニたちはこうした伝導師にどう対応していたのか。この地域のミッションに対するアボリジニ側の態度を伺うことのできる出来事を二つとりあげることにする。1957年，エルコでは，適応化運動（Adjustment movement）と呼ばれる事件が起こる。これは，アボリジニたちの側からの自発的な動きであった。この地域の中心となる父系出自集団，クランの代表者があつまり，それぞれのランガと呼ばれる神話にかかわる秘密の聖なる彫刻を，夜のうちにミッションの教会の近くにコンクリートで固めた土台の上に建立し，全ての人々の前に白日にさらすという行動に

でた。これを彼らは「契約」と呼び，ランガを公開し，自分たちの秘密の知識を公開することによって，キリスト教を受け入れ，古い伝統的なやり方を捨てる，と宣言する意味あいを持っていた。これらのランガはこれまで成人男性のみが参加できる秘密の儀礼でのみ公開されていたもので，女性や子供たち，または外部者が見るものではなかった。朝，全ての出自集団のランガがミッションに一斉に公開されたのを見て，女性たちはパニックを起こし，大騒ぎになったという。この動きを中心的に動かした男の一人バタンガ（Batannga）は驚き嘆く女たちに，これまで秘密にしてあった知識があったから各集団間での争いが耐えなかったのだ，古いやり方は正しくない，神が我々を導いてくれる，白日もとに秘密をさらすことで，神はわれわれを祝福してくれる，と説明した。このときに，伝統儀礼をエルコから排除するという決定もあわせて行われている。

この動きは，1930年代から伝道師たちと接触し，積極的にエルコ・ミッションの建設に携わってきた数人の男たちが中心となっておこされたものである。バーントによれば，こうした人々は，キリスト教的な価値観と伝統的な価値観のメディエーターとして板挟みになる状況におかれていたという。また，この事件に先立って，米豪共同調査団がこの地を訪れ，秘密の儀礼を撮影し，そのフィルムがその後エルコで上映され，人々がすでに秘密は明かされてしまったと，ショックを受けたという事件があった。バーントはこのことが直接の契機になっていると指摘している（Berndt 1962)。一方，ハリスは戦争の与えた影響をその背景として指摘する。ミリンギンビの空軍キャンプやダーウィンでミッション以外の大量の白人と初めて接し，大量で圧倒的な最新の軍事装備とそれを操る白人を目にし，機銃掃射や爆弾を経験したことで，白人たちの力の強さを認識することとなったという（Harris 1990)。そして，秘密ものであったランガを公開することで白人のもたらす財を獲得しようとした動きだったと杉藤は分析している（杉藤 1990)。いずれにせよ，この事件は，当時のエルコのアボリジニたちが，ミッションを非常に好意的に受けとめており，両者の間に良好な関係があったゆえに積極的にキリスト教文化に近づこうとした動きであったとみることが妥当だろう。

3　イルカラでの土地訴訟

一方，イルカラでは主任監督ウエルズがとった行動に関連して述べたように，1968年に後の先住民の土地権成立につながるゴーブ訴訟がおきる。アボリジニたちはウエルズらのサポートを得ながら福祉局などに抗議の手紙を書き，鉱山開発の差し止めを

求めた。中央の政治家もイルカラを訪れ，アボリジニたちは彼らに自分たちの土地とのつながりの強さと，それを象徴する樹皮画のことを説明した。そして，ウエルズや政治家達の進言に応ずる形で，アボリジニ達は自分たちの土地についての伝統的な神話を描く樹皮画を陳情書とすることになる。つまり主なクランの神話をあらわす絵を縁取りとして，まん中にタイプ打ちした陳情書を張り付けた樹皮を下院におくったのである。そして，1968年，イルカラのアボリジニたちは，連邦政府のボーキサイト採掘許可に対して採掘差し止めを求めた訴訟を起こした。ウエルズだけではなく，ミッションのスタッフたちは積極的にこの訴訟に関わった（Griffiths 1995）。彼らの訴訟は，敗訴に終わるものの，この裁判をきっかけとして調査委員会が組織され，その報告がアボリジニ土地権法案（北部特別州）の成立につながったのである。「たくさんの伝道師が入れ替わり，立ち替わりやってきたけれど，ウエルズは本当に私たちのために働いてくれた。彼にはもっとイルカラにいてほしかった。」とイルカラのアボリジニは彼について語っている（Yunupingu 1997）。このようにイルカラでおきた初めての土地訴訟は，ミッションのスタッフの協力のもと，可能になったものであることが指摘できるのである。

おわりに

Ⅲ節で簡単に紹介したメソジスト派の3つのミッションの主任監督者たちの言動は，それまでの伝道師たちと比較して，独自なものであり，かつ，共通性が見られる。それは，アボリジニ文化を理解しようという積極的な姿勢ある。どの伝道師も白人的な価値観を強圧的に押しつけることをよしとしておらず，おこなってもいない。それどころか，彼らはアボリジニの言語，慣習などの文化を熱心に学び，理解しようとしている。例えば，ウエッブは，複婚というキリスト教的考え方では受け入れがたいはずの慣習にさえ理解を示している。また，シェパードソンは，同化とはむしろ反対の方向のベクトルと思われる，ブッシュでの小集団での居住である，アウトステーションの建築に尽力し，押し進めた。

もちろん，こうした伝道師たちの対応はメソジスト派において独自にうまれたものというよりも，全体的な対アボリジニ政策の流れにのったものとみることが妥当だろう。Ⅰ節で述べたように，このころになるとCMSの方針にも共通したアボリジニ文化を尊重する考え方がみられ，1940年代にはアボリジニの価値観を認めようとする相対主義的な理解が次第にオーストラリア社会の広い範囲で受け入れられるようになる

兆しがみえるからである。このことは，同じメソジスト派でも，II節でもふれたように，1916年に最初に建設されたゴルバーン島のミッションでは，寄宿舎に混血のアボリジニの子供を親から隔離して収容し，同化，教育することを主な目的としていた事や，1925年にミリンギンビでも複婚の禁止をめぐって，伝道師の殺人騒ぎがあったことなどを見ても，戦前には決してアボリジニ文化に親和的な方向だけで活動を展開していたのではないことがわかる。大きな流れとしては，ミッションの宗派をこえた時代による変化があったことは間違いない。

しかし，本論でみてきたように具体的なアボリジニの人々の経験は多様であり，その記憶は個別であった。各宗派のミッションの方針というこれまでの枠組みをこえたところに彼らの経験はあったといえるだろう。つまり，具体的なアボリジニに対する日常実践に大きく影響していたのは，個々の伝道師の考え方や態度であったのである。戦争前後，メソジスト派ではアボリジニ文化に親和的な伝道師たちの存在が目立つようになっていったことはみてきたとおりであった。ヨロンゴ地域のミッションの設立がいずれも1930年以降であることの意味は大きく，ヨロンゴへのミッションはその設立の時代によって，より明確に，白人文化を強圧的に押しつけない，アボリジニ文化に親和性の高い，人類学者のアドバイスの影響をうけた，文化相対的価値観が強く反映された方針を体現したものになった。ヨロンゴ地域の人々の植民地経験は，それまでのアボリジニへの入植のステレオタイプからは大きくへだったったものとなった。そして，このような歴史的背景が適応化運動や土地訴訟をめぐる一連の動きにみられるような彼らの反応を引き起こしたということができる。彼らの記憶するミッションは個別具体的であり，多様である。ヨロンゴの人々が生きるポストコロニアル的現在の理解には，これらの考察が不可欠であるといえるだろう。

付　　記

筆者は，本論文でアボリジニという名称を用いている。現在，オーストラリアにおいて，Aboriginals という表現の方が差別的でない，という意見が一部にあることは承知している。それにもかかわらず，アボリジニという表記を用いるのは，これが日本語としての名称であるという認識からである。つまり，「アボリジニ」は，オーストラリアにおいてつかわれる Aborigines または Aboriginals の翻訳としてではなく，日本語でオーストラリアの先住民をさす名称であるという位置付けからである。1985年，国立民族学博物館の小山修三を代表とする共同研究会で，当時まだほとんど知名度がなく，研究者間でも名称が統一されていなかった状況で，なるべく簡潔な日本での名称として何が相応しいかという議論がおこなわれ，「アボリジ

ニ」と決定したという経緯がある。そしてそれから10年以上の時間を経て，マスコミを含めて「アボリジニ」という日本語表記は，かなり定着している。また，こうした現地や英語圏での，特に研究者を中心とした議論において，民族名称が変転することはオーストラリアに限らず，常にみられることであり，反対にいえば，近い将来，Aboriginals もまた，差別的な名称であるという議論がおきてこないとは保証できない。こうした状況の中で，いたずらに日本語としての呼称を操作することは，その表象性を混乱させるだけで，得るところは少ないと筆者は考えている。

本論文は，国立民族学博物館教授の小山修三を研究代表者とする平成7年度～9年度の文部省科学研究費補助金国際学術研究「オーストラリア・アボリジニ社会における知識・情報・価値の文化人類学的研究」（課題番号07041041）による成果の一部である。

注

1) 1991年に和解委員会（The Council for Aboriginal Reconciliation）が組織された。2001年の連邦成立100年までに，先住民の文化遺産を正当に評価し，正義と平等を獲得することをめざして活動を行っている。詳しくは和解委員会ホームページ http://www.austlii.edu.au/au/orgs/car/ 参照のこと。
2) 本論では，「ミッション」とは，キリスト教伝道団の意味で用いる。
3) 「白人」とは，一般にオーストラリアで用いられる white Australians の意味で用いる。主流社会側のイギリス系住民を指す。
4) エルキン教授に積極的に助言を求めたのは，1937から39年まで内務大臣（Minister for Interior）を勤めたマックイーウェン（McEwen, J.）であった（Harris 1990）。

文　献

Altman, Jon.
1987 *Hunters and Gatherers Today*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
Berndt, Ronald
1962 *An Adjustment Movement in Arnhem Land*. Paris: Cahiers de L'Homme, Mouton & Co.
Clifford, James
1988 *The Predicament of Culture: Twentieth-century Ethnography, Literature, and Art*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
クリフォード，J.・G. マーカス編
1996 『文化を書く』春日直樹他訳，東京：紀伊国屋書店。
Cole, Keith
1985 *From Mission to Church: The CMS Mission to the Aboriginies of Arnhem Land, 1908–1985*. Bendigo: Keith Cole Publications.
Commonwealth of Australia
1997 *Bringing Them Home: Report of the National Inquiry into the Separtion of Aboriginal and Torres Strait Islander Children from Their Families*. Sydney: Human Rights and Equal Opportunity Commission.
Dewar, Mickey
1995 *The 'Black War' in Arnhem Land: Missionaries and the Yolngu 1908–1940*. Canberra: The Australian National University, North Australia Research Unit.
Griffiths, Max
1995 *Aboriginal Affairs: A Short History*. Kenthurst NSW: Kangaroo Press.

Harris, John
1990 *One Blood: 200 years of Aboriginal Encounter with Christianity.* Southerland NSW: Albatross Books.
窪田幸子
1993 「多文化主義とアボリジニ」清水昭俊・吉岡政徳編『オセアニア 3 近代に生きる』pp. 99–113, 東京：東京大学出版会。
McKenzie, Maisie
1976 *Mission to Arnehm Land.* Adelaide: Rigby Limited.
Shepardson, Ella
1882 *Half a Century in Arnhem Land.* Torrens Park SA: PanPrint.
杉藤重信
1990 「1パーセントの人々＝アボリジニ——長老ブルマラの世界」中野不二男編『もっと知りたいオーストラリア』pp. 82–94, 東京：弘文堂。
Thomas, Nicholas
1992 The Inversion of Tradition. *American Ethnologist* 19(2), 213–232.
Wells, Edgar
1982 *Reward and Punishment in Arnhem Land 1962–1963.* Canberra: Australian Institue of Aboriginal Studies.
Yunupingu, G. (ed.)
1997 *Our Land is Our Life: Land rights' Past, Present and Future.* St. Lucia QLD: University of Queensland Press.